
すばる

884

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すばる

【Nコード】
N0352Q

【作者名】
884

【あらすじ】
僕は成仏執行人である。すばるの近くに住んでいる。人間は無重力空間で、体内からの爆発により、瞬時に素粒子に分解されることで、魂と呼ばれるエネルギー体を抽出される。僕らはこれを成仏と呼ぶ。

僕は毎日人間を爆発しながら考えている。昔、先輩のシズさんが言っていたことを、周回軌道のようにぐるぐると。

ぼくは成仏執行人である。スバルの近くに住んでいる。

？宇宙の無重力空間で、？生きたまま、？体内から発生する強力なエネルギー爆発で、？瞬時に肉体を素粒子まで爆散させると、人間は成仏する。ぼくら執行人は、これの「爆発」の部分をやる。これをやると、「たましい」と呼ばれるエネルギー体が傷無く抽出できる。

成仏は、地球では、その社会的ステータスのバロメータとなっているようだ。なぜなら成仏するには非常な力が必要である。つまり、火葬・土葬をされた奴は貧乏人である。

まあ、そうは言っても、来る人を作業的に「成仏」させるほどの身にすれば、被成仏人の貴賤はどうでもよい。

ぼくら執行人は、作業場である宇宙ステーションに常駐する。ずいぶん遠いところぐるぐる回る青い星にぼくが最後に立ったのは、もう数十年も前の話だ。あの星に還るのをよしとせず、宇宙で爆散したがる人々を長く見てきた。しかし、ぼくはひとりだけ、この流りに背いた人を知っている。ずいぶん前の話になるが、ぼくがまだ新米の執行人として、宇宙へ出てきたころには、もう、「天才」として名をとどろかせていた、シズ先輩の話しよう。

ぼくは、分厚い硝子の詰め込み窓からスバルを見ていた。銀の砂子を、誤ってぶちまけてしまったような、なにか、加減を間違えたんではないかと思うほどの、星々が、あちらで固まりになり、こちらで固まりになり、またその固まりの間あいだにもびっしりとある。正直、どれがスバルが全く見分けがつかなかった。しかし、シズ先輩は正確にスバルを見分ける技能を持っていた。真理を指すように、迷い無くまっすぐ、先輩の白い指がスバルを指し示している光景を、ぼくはまだ鮮やかに覚えている。

シズ先輩はやせっぽちだった。誰かと握手するだけで、折れてしまうのではないかしら、と思うくらい、ひよろひよろだった。いつも、ステーションの、スバルの見える窓のあたりで、ぶかぶか空中に浮かんでいた。

そんなつかみ所のない先輩だったけれど、人間を爆散させる技術においては右に出る者はいなかった。先輩のあの、スバルを正確に指さす、白い手のひらにかかれば、肉体は素粒子のひとつだって傷つかなかった。だから、先輩に成仏させて貰おう、という人間は後を絶たなくて、シズ先輩は、ぶかぶか浮いてる以外の時間は大抵仕事をしていた。

君は死んだらどうするの。

ある日シズ先輩がぼくに、ぶかぶか浮きながら聞いた。これはシズ先輩に初めてかけられた言葉だった。大先輩である。ぼくはとて

も緊張して、なにか誤ってはいけないと思い、

お金は無いので、おしまいです。

と、いちおう、ありのままを述べたら、先輩の大きな瞳がきよろきよろと空中をさまよって、興味深げにぼくを見た。

シズの所へ来なかったのは、君が初めてだ。

シズ先輩のもとへはいろんな人間がやってきた。肌の白いのも黒いのも、子供も老人も、男も女も、とびきり美しいものも、なんだからよくわからないものも。でも、それらも、先輩の手にかかれば、均等に、たましいになった。そして宇宙へ飛んでいった。たましいになる瞬間の、あの爆発の、真赤の閃光を、一日に何人分もその瞳で見ている筈なのに、先輩の瞳はいつまでも、変わらず、冷たいアイス・ブルーだった。

あるとき、突然、シズ先輩に話しかけられたことがある（だいたいいいつも、突然なんだけども）。やはり先輩はスバルの窓のそばでぶかぶか浮いていた。そしてぼくは、情けないことに、今にも死にそうな時だった。ぼくはまだ新米だった。「成仏」執行に失敗して、ほとんど自爆みたいなことになったのだった。いつそきれいに消し飛ばせばいいものを、まあ、中途半端な力加減だったもので、単に大けがをして終わった。

「成仏」は時々失敗する。それはただ、人体を粉々にして終わる。ぼくはすすご逃げてきた。身体のおちこちに、ぼくが成仏させてあげる筈だった人間の肉片がまだへばりついていて。まるで取り憑かれたようだ。ぼくは這々の体で、あらゆる叱責や侮蔑や、生々し

い悲劇から逃げ出して、スバルの窓の部屋にいた。その、異常なまでに静かな部屋が、ぼくの三半規管をゆっくりと侵し、鼻腔から白目をシンと冷やし、うなじから脳髓を舐めていった。ぼくはぶかぶかと浮いていた。

リンゴたべる？

と、シズ先輩は聞いてきた。ぼくが、はあ、とか、まあ、とか、ああ、とか要領の得ないうめき声を出しているあいだに（じっさい喋れる体調じゃなかった）、先輩は、しゃくしゃくと景気よくリンゴを嚙っていた。

君は死んだらどうするの。

リンゴの答えは聞かないで、シズ先輩は聞き覚えのある質問をした。一口リンゴを嚙って、ぼくのほうへふらりと漂ってきて、そのアイス・ブルーの瞳で、血だらけのぼくをじっと見た。ぼくは普段、その冷たいブルーを、見る者を閉じこめる真空地帯のように思っていたが、そのとき、先輩のひとみには、一瞬キラリと流れ星が尾を引くように光が灯っていた。あつ、と思うと、先輩はぼくのくちびるに自分のくちびるを押し当てて、噛みしだいたリンゴの果肉をぼくの口腔に押し込んだ。酸っぱい甘みが、喉の奥に、ヒヤリ、とした。

くちびるを離れた先輩は、少しだけ、ひとみを眇めて、スバルを見る時のような顔になって囁いた。

シズは、嫌だよ。

シズ先輩の、子供のように小さくて半透明な歯が、リンゴか、ぼくの血液か、赤く濡れていて、まるで真っ赤な羊歯のようだった。

ある日、とても困難な成仏依頼が、ぼくらの元に舞い込んできた。ぼくが宇宙に来て五年ほど経った頃だったと思う。

依頼人は男女の二人だった。二人別件なら問題ないのだけど、彼らは同時に成仏させてほしい、と言う。同時に爆散して、魂も融合して、宇宙をいきたい、ということだった。

ぼくら執行人は、被成仏人の肉体を爆散させて魂を取り出すのだが、ふたりを同時、となると、執行者ふたりで爆散の威力・力加減・タイミング、その他様々細かいことを、全て同値で、全て同時に、こなさなければならぬ。

この困難な依頼はもちろん、シズ先輩にお鉢が回ってきた。シズ先輩は、いつもの調子で、ぶかぶか宙をさまよいながら、ぼくに、「一緒にやろう」と言った。

そのころにはぼくも、さすがに、すこしは経験を積んでいた。しかし何年経っても先輩は、ぼくらの中の天才で、そして、いつでも、あの死にかけていた日の、分厚い窓の向こうのスバルと、先輩の薄く乾いたくちびる、喉に張りついたリンゴの汁のヒヤリとしたのが、まだ体中の各部位に染み付いていた。一緒に耳の奥にも、先輩の湿った声がまだ、あのときのままに掬っている。

シズは、嫌だよ。

依頼は失敗した。それは爆散ではなく、ただの爆発だった。そこから中に、肉片と内蔵が飛び散って、びっくりするくらいの量の血液が噴射された。暴発の瞬間、ぼくは誰かに庇うように抱きしめられた。折れそうな程に細い身体。シズ先輩だった。

シズ先輩はその事故で、右腕を無くし、立てなくなり、致命的な量の血液を喪った。

先輩は、ほとんどでない声で、ぼくに囁いた。ねえ。ねえ。

耳の奥に、その細い声はまだ、あのと時のままに掬っている。先輩は、ぼくの耳元で、「シズは、やだよ」と、泣き声で言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0352q/>

すばる

2011年1月13日00時07分発行